

聖学院大学 様 導入事例

大学図書館のシステムをクラウド化、 時代の変化に対応し、安心と利便性を実現

聖学院大学の図書館は、長く課題だった図書館システムの刷新、クラウド化を実現しました。サーバを大学が自ら運用する負担をなくすとともに、停電などの物理的トラブル、ウイルス感染などのセキュリティ課題への対応を軽減し、利用者サービス向上のための検索機能強化、データベースの利便性向上などを実現し、デジタル時代の図書館運営に向かって第一歩を踏み出しました。

ソリューション iLiswave-J 図書館クラウドS.E. (Standard Edition)

課題

- CiNiiResearchなどのデータベース利用について利用者へわかりやすい案内ができていなかった
- サーバが大学図書館棟内にあったため、停電事故やランサムウェアの不安が常にあり、実際に停電したときの対応には時間と労力を要した



効果

- iLiswave-Jの導入によって、図書館ホームページからデータベース一覧を案内することで、利用者がスムーズに情報にアクセス、検索できるようになった
- クラウド化したことで、事故などの不安から開放され、管理上の負担が大幅に軽減された



聖学院大学総合図書館 学務部司書課
田山 恭司氏



学校法人聖学院 法人センター統括部
鈴木 純氏

(注2)から、当図書館のOPAC(注3)への連携がうまくいかないことがありました。CiNii Research で自館の蔵書の有無はわかっても、OPAC の検索結果に跳べないといった問題があったのです」と田山 恭司氏(総合図書館、学務部司書課)は振り返ります。

もう一つは、停電などへの対応です。「サーバは図書館棟内に設置され、場所は近いのですが、落雷などの停電時の対応・復旧には大変な手間がかかります。また、施設点検のための法定停電も定期的を実施されるため、システム担当職員にとって停電への対応は日常業務の一つになっていました」(田山氏)。

サーバ室は図書館棟の応接室を改装した部屋で、図書館システム以外のサーバも設置されているため、入室管理に気をを使う面もありました。「ランサムウェアなど、セキュリティ上の心配もあり、これらの課題を解決するため、クラウド化は長い間の懸案になっていました」(鈴木氏)。

司書課ではこうした課題解決と、コスト面、同法人内の付属中学校・高校と同じシステムを利用するなどの条件を合わせ、新システムを考えました。

(注1)ILL Interlibrary Loan(図書館間相互利用)。利用者に必要な資料が大学図書館にないとき、他大学の図書館などに複写、貸出しが依頼できるILLサービスが用意されている。

(注2)CiNii Books CiNii(サイニー)は、NII(国立情報学研究所)が管理・運営する学術情報ナビゲータである。そのサービスには全国の大学図書館にある書籍・雑誌の情報を検索できる「CiNii Books」、文献だけでなく研究データやプロジェクトの情報を検索できる「CiNii Research」などがある。

(注3)OPAC Online Public Access Catalog(オンライン蔵書目録)。各図書館の持つオンライン蔵書目録。書影付きのウェブOPACも増えている。

背景

情報連携の改善、停電やセキュリティが積年の課題

埼玉県上尾市にある聖学院大学では、数年前から大学図書館のシステムの変革に乗り出しました。前提としては学校法人聖学院(幼稚園から大学院までを運営)が2018年から2023年の方針「聖学院ビジョン」の経営アクションプランの一つに、学園全体のICTの拡充を掲げたことがあります。

同大の図書館システムを担っていた企業がこの分野から撤退したこともあって、大学図書館は旧システムを刷新し、これまでの課題を解決することを目指しました。

「システムに関係する図書館の課題は大きく二つありました。一つは学術情報データベースとの情報連携ができていなかったこと。ILL(注1)との連携はできているものの、CiNii Research

導入ポイント

実績と抜群のインターフェースから選択

司書課では2018年頃から「図書館総合展」に足を運ぶなど、図書館システムについての情報収集を開始し、2020年には富士通を含む4社のベンダーの提案に絞り込み、検討しました。

その結果、選んだのが富士通の iLiswave-J です。選択の理由はまず、富士通に ICT やシステムでの圧倒的な実績があること。

「他のベンダーの提案もクラウドでしたが、富士通の歴史、規模ともに安心感がありました。データセンターも富士通が自前で持ち、オール富士通という魅力もありました」(鈴木氏)。

「大切なデータを預けるのでセキュリティ面は特に重視。その点、富士通には豊富な実績と技術力があって信頼できました。また、iLiswave-J が、色彩や表現など第一印象が最も優れていると感じました。帳票などをある程度カスタマイズができることも魅力でした」(田山氏)。

スムーズなシステム導入を実現

クラウドシステムへの移行は2021年度中に行われました。この間、聖学院大学の司書課全員(4名)、法人センター1名、聖学院中学校・高等学校、女子聖学院中学校・高等学校の担当者(各1名)の計7名と、富士通、および富士通のシステムパートナーである東京コンピュータサービスのメンバーが加わり、オンラインでミーティングを重ね、詳細を詰めていきました。

「富士通のデータセンターにクラウド環境を構築することで、堅牢なファシリティと万全なセキュリティ対策を実現しました」と富士通 Japan 文教・地域ソリューション開発部(大学ソリューション事業部 第一システム部)の小島 瞳は語ります。「サービスが稼働しているデータセンターとは別地域のデータセンターでバックアップを管理することで、災害時のBCP対策にも配慮しています。平時にはサービスを安定稼働させるためにツールや有人監視を組み合わせ、また異常発生時に速やかに復旧させるためのサポート体制を24時間365日運営しています」(小島)

聖学院大学と富士通の間の調整をはかった東京コンピュータサービスのSE、小林千秋氏は「図書館クラウド S.E. は基本的にシステムへ運用を合わせていただく製品となりますが、全てを合わせなければいけないわけでもありません。お客様の現状運用とシステムとのギャップを可能な限り小さくするべく、導入時にヒアリングを重ねて運用に最適なシステム設定へと努めました」と振り返ります。それは例えば、年度締め処理としての柔軟なデータ検索(聖学院の各館ごとの冊数、受け入れ金額集計など)の機能に反映しています。

効果

導入はスムーズに進み、新システムは2022年4月から稼働を開始しました。

「稼働には何の問題も起こっていません。サーバを近くに置かなくても何ら支障がないことにあらためて気づかされました。また私の感覚ですが、以前、原因はわからないものの、システムの動作が目に見えて遅くなるのが何回かありました。しかし今のシステムにしてからはそうした問題はまったくなくなりました」(田山氏)。

また長期的に見れば、司書課が今後、システム更新によるデータ移行、設計などの作業に携わらなくて済むことは、大きな負担の軽減になります。

期待と展望

富士通のサポートにも満足いただいています。サポートデスクでは、図書館クラウド専用のポータルサイトで、図書館からの運用に関する質問、相談、要望などの受け付けをし、各種マニュアル、FAQ情報もここに集約しています。問い合わせなどに対応できるメンバーが常駐し、特定の担当者に依存しない体制を取りました。

「問い合わせに即答していただけるのはありがたいですね。旧システムのベンダーでは一人のSEに頼る形なので担当SEに連絡が取れないで困ることがありましたが、富士通の場合、組織として対応する形なのも良い点だと思います」(田山氏)。

「将来、図書館の業務は外部委託が進む気がします。資料の電子化も進むでしょう。大学がわざわざ図書館を持つ意味を考えざるを得ない時代が来ると思います」(鈴木氏)。

そうした将来に向け、富士通の図書館システムは関係者に寄り添い、共により優れた図書館システムを目指していきます。

お客様プロフィール

聖学院大学

創 立 1988年
 所 在 地 埼玉県上尾市戸崎1-1
 学 生 数 学部2,294名 院41名
 (2022年5月1日)
 概 要 3学部5学科
 U R L <https://www.seigakuin.jp>



東京コンピュータサービス株式会社

設 立 1969年8月4日
 所 在 地 東京都文京区本郷1-18-6 トーコンビル
 人 員 数 515名(2022年1月現在)
 概 要 情報処理機器、装置の総合サービス(販売、製作、運用、保守、修理等) 情報システムの設計、構築、運用電気工事、電気通信工事の請負施工
 U R L <https://www.to-kon.co.jp>

富士通 Japan株式会社 お客様総合センター

0120-835-554 (通話無料)

ご利用時間：9時～12時、13時～17時30分(土曜日・日曜日・祝日・当社指定の休業日を除く)

● 本事例中に記載の肩書きや数値、固有名詞等は取材日現在のものです。